

たり本を読んだりしている。放課後、友達
が来ると笑い声を立てて遊んでいる。

どうして学校に行けないのか、分からない。
転校でもさせれば、気分が変わって行けるよ
うになるだろうか。

圭子は、ほとんど疲れ果てたように大きな
ため息をついた。カオリはといえば、ただ黙
って母親に寄り添うように話を聴いていた。

母親の圭子は、30代半ば、なかなかの知的な美
人です。カオリの方も、至って素直そうな普通の
少女です。どうして、不登校になってしまったの
でしょう？

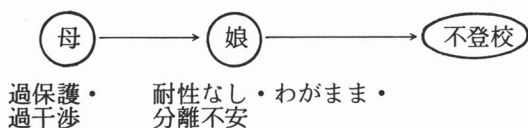
2回目の面接には、父親、浩二氏にも来て頂き
ました。氏は、一流コンピュータメーカーに勤め
る優秀なエンジニアです。

ところが、面接が始まってまもなく、佐藤夫妻
は、互いにのしりあい始めてしまったのです。
夫は、最初から不機嫌そうに、妻の過保護・過干
渉がすべての原因なのだと主張します。一方、妻
の方も、夫の無関心・無責任が家庭を台無しにし
ているとして、激しく追求します。

その間、カオリはといえば、眉をしかめ、神経
質そうに鼻をピクピクさせて、不安な表情です。
ただし、佐藤夫妻はそれに全く気付かない様子な
のです。

循環する因果関係——「母原病」は正しいか？

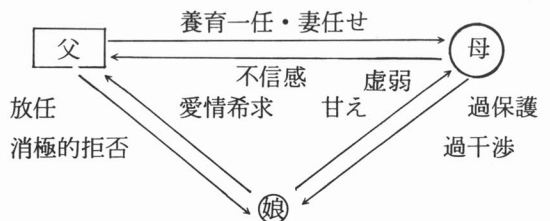
浩二氏が指摘するように、圭子の養育態度には
多分に過保護・過干渉の一面がありました。それ
では、そのせいで、カオリは耐性の乏しいわがま
娘になり、また母親に対する分離不安から学校
に行けなくなったのでしょうか？これを分かりや
すくするために、図式化してみましょう。



このように、1つ(ないし複数)の原因から1
つの結果が生まれるという考え方を、直線的因果
関係と呼びます。一時流行した「母原病」という
考え方もこのような見方に立っています。

しかし、家族カウンセリングでは、全く異なっ
た考え方をします。母親の過保護は、父親の養育
無関心や娘の病弱さとむしろ相互的な関係にある。
母—父—娘の三者の関係は、互いに原因であると
ともに結果でもあると見るのです。

これを循環的因果関係といい、図式化すると下
のようになります。



このように考えますと、母親が悪い、いや父親
が悪い、といった“犯人さがし”は、あまり意味
のないものになります。それよりも、家族関係を見
なおし、悪循環を断ち切ることの方がはるかに
大切なことになってきます。



ムンク「病室の死」から(部分)

親もまた、問題をかかえて生きている

驚いたことに、夫妻は大変似通った家族関係の
なかで育っていました。堅実で、やや保守的な家
庭環境——ワンマンな父親、じっと耐えながら家
事一切に専念する母親……。それはまさしく